

共同存在から個人の在り方を考える

——持続可能な関わりへ向けて——

増田 啓祐 (東京農工大学大学院・博士課程)

1、本報告は“共同存在における個人”の在り方を検討するものである。丸山真男に典型的にみることができるように、近代以降の個人概念は共同体からの解放によって個人が確立されるとしてきた。その丸山がモデルとした近代的個人は自立化・民主化という「近代的思惟」(内面的自律に基づく社会的政治的主体の思惟)に基づく個人であった。しかし、近代以降そのような個人は育たず、逆に大衆化や原子化といった現象を生んだ。その原因に対し丸山は日本人の「近代的思惟」の欠如を問題とするが、私は近代的個人概念の帰結として大衆化や原子化は起こったと考える。

2、近代的個人概念により関わりの在り方は変質したが、新しく生まれた関わりには持続可能性が醸成されにくいという問題があった。「近代的思惟」を尊重する市民概念(自由選択参加型市民)では「自立」した個人間において関わりの在り方を想定するからである。そこにおける関わりでは共通認識を共有することが困難である。例えば「生活の場」における共同性を考えると地域の維持管理のために自由選択参加だけではない領域(そこに住む限り共有されるべき共同性)が存在する。市民概念における個人ではそのように地域を自ら治めていくようなインボランタリーな領域に対する参加への理解が共有されにくい。

人間存在が揺らぐ現代においてまず再興が必要なのは自分達が生きる足元であるこの「生活の場」における関わりの在り方である。そこで私は「自立」した個人同士の関わりの在り方からではなく、共同存在における個人の在り方を考察する必要があると考えた。それは人間存在を「自立」した個人の「近代的思惟」に求めるのではなく、他者との関わりのなかに見出すという意味で、大衆社会のなかで原子化した個人が交錯することなく立たされている今、積極面がある。

3、共同存在に着目したのは和辻哲郎である。しかし、和辻の「間柄」においては動的統一として個人が全体に還るという構造を内包していた。それは「国の家」としての国家に個人が最終的に還元されてしまう戦前の国家主義と親和性のあるものであった。このような背景を持つ日本において求められる関わりの在り方は、先に述べた共有されるものを醸成しにくい近代的市民同士の関わりでもなく、和辻のいう全体に還る「間柄」でもない、新たな関わりの在り方であればならない。そのような見地からカール・レーヴィットを参考にする。レーヴィットは同じ「間柄(Verhältnis)」でも私の「唯一性」を担保とした「人間仲間(der Mitmensch)」における個人を想定する。本報告では、和辻とレーヴィットの「間柄」の相違から求められるべき“共同存在における個人”をどう位置づけるのか考える。